

# 福原麟太郎著作目録をめざして

## — 雑 感 —

藤 井 哲

### I. 発 端

福原麟太郎（1894-1981）の名を耳にして彼が英文学研究者であり随筆家であったことに思いあたる者は、かなり年配の読書家であろう。あるいは現役の英文学研究者や英語教師のあいだでなら福原の名を知る者の割合が多少は増えるであろうが、それでも通用範囲は年々狭まってきているようだ。同業の何人かに尋ねてみても、福原の本を読んで得るところがあったと語る人は少なくなってしまった。

そうした少数派のそのまた末端にぶら下がっている筆者が、福原と出会った最初期の経験として思い出せるのは、筆者が英文学科に入学してまだ間もない頃に授業で『文学の人生』（研究社出版、1970）を薦められた時のことであった。福原と文学研究者や評論家たちとの対談を集めたこの新刊書を通して、英文学への初歩の手ほどきを福原にしてもらったような気がしている。その後ただちに『読書と或る人生』（新潮選書、1967）を紐解くことになり、当時の英文学科の学生ならば知っておくべき基本文献についてのおおよその知識を仕入れることができた。大学院に進んでSamuel Johnson（1709-84）すなわち18世紀の英国文壇に多大なる影響力を揮った文人に取り組もうと決めたのも、福原による評伝『ジョンソン』（研究社出版、1972）が切っ掛けであった。そして大学院受験に必須な参考書の福原編『文学要語辞典』（研究社出版、1960）にも大いに助けられた。このように福原との出会いを重ねるうちに、筆者は福原の（書籍を介してではあるが）弟子のひとりであることを自認するまでになっていた。<sup>1</sup>

教壇に立つようになってからも続けてきたJohnson研究のささやかな成果の一端として、筆者は『日本におけるサミュエル・ジョンソンおよびジェイムズ・ボズウェル文献目録（1871-2005）』（ナダ出版センター）を2006

年に出版したのであるが、それは日本で蓄積されてきたJohnsonと、彼を崇拜し伝記を残したJames Boswell（1740-95）についての研究論文や紹介文など約1,600件を記述した書誌であった。そしてその『目録』をまとめていしばしば遭遇した名前が福原麟太郎であった。巻末の「人名索引」に数えてみると、約90件の関連文献で福原が関わっていたことが判る。加うるに、福原の数多いお弟子さんたちによってもJohnson論がしばしば発表されており、たとえば『福原麟太郎先生還暦記念論文集：近代の英文学』（研究社出版、1955）で数えると、収録された58論考のうちJohnson関連だけでも11篇に昇っている。このようにして、福原が日本でのJohnson研究を昭和時代（1926-89）の全期間にわたって牽引してきた存在であったことが『目録』から読み取れるのである。という経緯から筆者は、英文学世界への導入においても、Johnson研究においても、計り知れない学恩を福原から被ってきたことになるのである。

その福原の著書を書店の棚に見出すことは今ではほとんどなくなってしまった。「何ごとにおいても節度と寛容と趣雅を重んじ…その人間性と学問的探求心と文才」<sup>2</sup>とが渾然一体となった、英文学方面での多彩な研究成果に加えて日常生活に題材を得て人生をしみじみと語るといった長短無数の随筆とからなる福原文学が、いま忘れ去られようとしている。現在では英米文学科志望の高校生も、卒論を準備中の学科生も、英文学研究に取り組んでいる大学院生も、ほとんど誰ひとりとして福原の書いたものを味読する者はいないであろう。研究対象の作品を楽しむという福原の姿勢に触れる機会は遠退く一方であろう。今日の研究者たちには、先鋭的な研究業績を積み上げることが求められているので、半世紀以上も昔に書かれた英文学に遊ぼうとする書などを悠長に読

<sup>1</sup> それでいて福原麟太郎先生と敬称付きで呼びたくないのは失礼なのかもしれないが、本論の性格上、言及する方々に対しては、原則的に敬称を略させて頂いている。

<sup>2</sup> 『英米文学辞典（第三版）』（研究社出版、1985年）に平井正穂の執筆した項目「福原麟太郎」があり、それより引用した。

んでいられる場合ではないかもしれない。ゆえに一部の専門家に訴えるだけの無愛想な論文を尊しとする風潮が跋扈するようになり、ともすれば一般読者を感化し英米文学研究の楽しさに引き込もうとする姿勢が二の次にされてしまい、これでは嘆かれるようになって既に久しい文学離れ現象に拍車が掛かるばかりであろう。

そこで筆者は考えた。このままでは遠からず福原文学は完全に忘れ去られてしまう。そうなったら、文学とくに英文学への関心をこれからの世代に喚起することはますます難しくなるであろう。しかし文学研究の成果にあっては新が旧に取って代わるといふ理系的発想は通用しないということが将来もし再認識され、そして大学が学生の奪い合いで殺伐としている時代が過ぎれば、意欲ある学生など若い世代が過去の知的遺産にも視線を向けるようになり、福原の残した文章に遭遇しないとも限らない。そうなれば英文学の魅力に気がついてくれる者が増えるであろう。そうした時代の到来を期待して、散逸しないうちに福原の業績を集め得る限り集め、それらに関する情報を記録しておきたいと筆者は思い立った次第である。

筆者には上述の『文献目録』をまとめた経験があるので、その際の手法を応用して福原文献を発掘し、収集

し、記述したいと考えている。<sup>3</sup> 学生時代から少しずつ集めてきた蓄積も活かせるし、インターネットで集めやすい情報も多くなってきている。忘れられつつあるという状況を反映してか、資料も市場に出さえすれば手頃な価格で購入できる。タイミング的にも、筆者もそろそろ研究生活に締め括りを付ける時期にさしかかろうとしている。さらに言うならば、福原は郷里の広島県立福山中学校（現広島県立福山誠之館高等学校）を1912（明治45）年に卒業していたが、筆者の本籍地は福山であり、筆者の祖父藤井太郎は福山中学校で福原より6年先輩であった。<sup>4</sup> 以上のような好条件と偶然の縁とが重なって、筆者は2007年頃から『福原麟太郎著作目録』（仮称）の執筆準備に取りかかった。いらい今日までに、福原の文章を入手可能な限りで集め得たと考えている。それらのリストだけでも400字詰原稿用紙にして2,000枚分はあろう。先の『文献目録』でも試みたように、リストにある一点一点の文献に目を通し、それぞれの文章の性格を捉えたコメントを書き加え始めたところである。したがって本稿は、筆者のこれまでの作業過程や、その間に知り得たことや、感じた思いなどを書き留めた、いわば雑感集とでも呼ぶべきものである。

## II. 福原麟太郎の略歴

福原麟太郎とはいかなる人物なのか。ここでは極めて大雑把な彼の経歴を、筆者の関心に沿って述べておこう。<sup>5</sup> 彼が広島県沼隈郡（現在は福山市の西端部）に小学校校長の長男として生まれたのは1894（明治27）年の10月23日で、作家で英文学者でもあった坪内逍遙（1859-1935）や夏目漱石（1867-1916）からは一世代遅れて、齋藤勇と中野好夫に挟まれたタイミングでの誕生であった。福山中学では文学の同人会を興したり、地域の雄弁会に出場したり、英語授業の光景を東京の雑誌に投稿したりと、活発な文学少年であった。1912（明治45）年3月に同中学を卒業してから父のもとで一年間ほど代用教員を勤めたようである。

1913年4月に東京高等師範学校予科（英語科）に18歳で入学した。教授William Playfairの影響でThomas Gray, Robert Stevenson, Oscar Wilde<sup>6</sup>, Joseph

Conrad, G. K. Chestertonなどに親しみ、在学中から学内誌や郷里の雑誌などに文章を発表するようになった。もちろん英文学界へも積極的に出入りしており、生前の漱石を目の当たりにしたこともあった。そして漱石が死去した1916年に高師最上級学年に進学した福原は、雑誌『英語青年』（英語青年社のちに研究社）に連載で訳註を執筆するようになり、それから30年間以上にわたって訳註を続けることになった。研究科に進んだ翌年の1918年には喜安甞太郎のもとで『英語青年』の編集を手伝うようにもなった。

26歳（大正10年）で東京高師の助教授となり、「新文藝」、「牧人」、「亡羊」などの同人に参加して健筆を揮っていたが、自筆の「年譜」によると、32歳頃から「数年『英語青年』に訳註その他はなはだ多い。…同誌との関係は…昭和三十年に及んでいる」ほどに研究社との絆を

<sup>3</sup> 先の『文献目録』では、記述した文献の98%までを入手し、当該箇所に対して詳細な頁表記を施し、主旨を逐一咀嚼するなどして、先人たちの残してくれた業績に現代の研究者予備軍や現役研究者たちがアクセスしやすいよう執筆した。また発表年月を織り込んだ【文献番号】を案出し、適宜【主題識別番号】【初出】【再録】等の情報を添えたので、索引と併用すればクロス・レファレンスが容易にできるようになっている。

<sup>4</sup> さまざまな関連情報を提供くださっている同校同窓会の三村敏征氏が調べてくださった。

<sup>5</sup> 『福原麟太郎随想全集8』（福武書店、1982）所収の「年譜」（pp. 337-59）は福原自身により1968年まで記されたもの。また『天才について』（講談社文芸文庫、1990）には中村義勝作成の「年譜」（pp. 373-89）が掲載されており、それらを参照した。

<sup>6</sup> そのころ親しんだ作家について、福原は「大正の半ばまでオスカー・ワイルドを實に熱心に読みあさつて…その後文壇の流行が移つて、私自身、ワイルドを尊敬しなくなり、流行に従つてつまらん作家の爲に時間を浪費したと思ひ…」と1951年1月発表の「私の讀書遍歴」において述懐しているが、彼が文学作品と取り組む姿勢の一端を窺わせているようで興味深い発言である。

深めてきており、自らの研究書のほとんどを同社から出版することになるばかりか、英文学叢書を始めとする同社の中核的出版物にも関わるようになった。

文部省から英国留学を命ぜられ、34～36歳の時にLondon大学やCambridge大学で主にGrayを書誌学的に研究してきている。<sup>7</sup> 帰国とともに東京文理科大学助教授に任じられ、翌1932（昭和7）年から『英語青年』の編集を任せられ、編集者として同誌の「英学時評」を1958年頃まで執筆して、英語教育界でのオピニオン・リーダー的存在となっていた。

一般読者に向けて日常生活に取材した随筆や紀行文を彼は留学前後から発表するようになっており、『現代随筆全集』（金星堂、1935）には1934～35年の随筆が30頁にわたって掲載されたが、そのなかでも「治水」（1934）などは「イギリスのエッセイ文学というものの精髓を日本の風土に移し、日本語の文章にしたもの」と評されてもいる。<sup>8</sup> このような随筆作品への傾倒は、おそらく恩師岡倉由三郎教授から折に触れてCharles Lambの随筆集*Essays of Elia*（1820-33）を手解きされたことにも由来するのであろう。福原のこうした随筆好きが昂じた結果、1963年の日本芸術院賞が彼にもたらされることになった。

44歳（昭和14年）で教授に昇任してからは、英文教室トップとして助教授以下の後進の育成に積極的に当たるようになった。<sup>9</sup> その後45歳になった福原教授は、英文学とは「大人の文学」なのであって、Shakespeareは40歳になって、Lambは45歳になって、その面白さがどうにか解り始める作家であるとの認識に至ったらしい。そして彼が好んでSamuel Johnsonを読むようになったのも、46歳になった頃すなわち1940年前後からであった。<sup>10</sup>

太平洋戦争も雲行きが怪しくなってきた頃、福原は演劇評でも活躍し始めた。二十歳代から歌舞伎に親しむなど、能、狂言、新派も含む国内の舞台芸能に幅広く親しんで磨きを掛けてきた風雅の世界が所を得たのであろう。1943年という戦局が暗転した年には、年間を通じて『東京朝日新聞』に劇評を発表するほどに健筆を揮った。時節柄もわきまえず風流の世界に遊んでいる脳天気人間にも見えようが、同年にはJohnson晩年の大著*Lives of the English Poets*（1779-81）を詳注した3巻本を一括

して出版するなどして、あえて敵性言語文学を研究する意気込みもアピールしていた。空襲が激しさを増してからもなお彼は大学の研究室にとどまって戦場に動員された教え子たちの連絡拠点を維持し、勤労働員された学生たちのために職場まで出張して研究科の授業を休むことなく続けるなど、時勢に阿らない英文学者らしい姿勢を貫いていた。

戦後直ちに日本英文学会の会長に選ばれ、2年間在任し、外務省でも外交官の卵たちに向けて英文学を10年近く語るなど名実共に日本の英文学界のリーダー的存在となった。54歳のとき（改組により発足した）東京教育大学教授も兼務、58歳まで文学部長、55歳から学長代理として大学行政にも関わったが、それだからといって研究が停滞することはなかった。ゆえに1956年には識者として「チャタレー裁判」で被告伊藤整のために証人を勤めた。そして60歳を迎えた1955年3月に停年を迎え、弟子たちの居る共立女子大学に迎えられている。<sup>11</sup> 同年には福原門下が論文を持ち寄った還暦記念論文集『近代の英文学』（1955）が刊行されたが、収められたのはShakespeare関連が32篇、Gray論3篇、Johnson論11篇、Lamb論4篇、Virginia Woolf論8篇という内訳で、こうした門下の研究傾向を通して、福原の英文学世界における関心が那邊にあったかを窺い知ることができるであろう。

1960年すなわち65歳のとき、おそらく弟子たちからの強い薦めもあって、福原は東京文科大学に論文「トマス・グレイの英詩研究」を提出して文学博士の学位を授与された。翌年『トマス・グレイ研究抄』（研究社出版、1960）により読売文学賞、そのまた翌年には日本芸術院賞も贈られたが、後者の際の授賞理由となった「英文学を基盤とせる随筆一般」は、我々が福原という人物を今日においてイメージするのに格好なキーワードになるのではなからうか。

その後も日本芸術院会員（1964）に選出されたり、『チャールズ・ラム伝』（垂水書房、1963）により再び読売文学賞を贈られたり、放送文化賞（1966）、文化功労者（1968）、二等旭日重光章（1669）、福山市名誉市民（1976）など数々の栄典に恵まれたのも、単に教育者・

<sup>7</sup> 『英語研究』（研究社出版）の1966年1月号に掲載された弟子の富原芳彰との対談「英文学的人生」によると、福原にはたまたまGrayを講義した経験があり、喜安に校正法を仕込まれていたことから、留学中の研究テーマを決めたらしい。

<sup>8</sup> 小石川の自宅玄関前に貯まった雨水を鍬を使って放流させながら、高低の目測の難しさを実感し、古の治水功績者に思いを致したこの随筆に、庄野潤三が『文学交友録』（新潮社、1995）で注目している。

<sup>9</sup> 高師教授石川欣四郎の急逝に伴い、福原の教授昇格が多少の紆余曲折を経たのちに承認された。それに伴って同教室助手から助教授に昇格した成田成壽が、上述の『近代の英文学』（1955）に掲載された「福原麟太郎先生」において、教育者・研究者としての福原を回顧しているが、そのなかで福原が「助教授十年は飽きた」とぼやいたことも伝えていて、その人柄に触れるようで微笑ましくもある。

<sup>10</sup> 『新潮』の1952年5月号に掲載された「この世に生きること（1）」には、「私が、英文学は、大人の文学であるとか、叡智の文学であるとか、言ひ出したのは、多分昭和十五年であつた」とあるが、確かに彼は「叡智の文学」（1940）でそうした開眼について触れていた。さらに「その頃から十年、ジョンソン大人の片思ひの親友になつてゐるわけだが、それでも時々、どうかと思ふことがある」とあるのは、「健康な批評家」（1941）を発表してからの十年ということであろう。

<sup>11</sup> そうした縁からか、後述の③が教えるところでは、福原の蔵書であった洋書2,200冊と和書10,000冊が共立女子大学図書館に寄贈され、彼の著作物の著作権も同大学が管理している由である。

英文学研究者としての業績のみにとどまらず、数多くの随筆や評論が多くの読者に支持されたからでもあった。何しろ福原の関心の所在の多様さとその守備範囲の広さたるや、彼の晩年にまとめられた全12巻の『福原麟太郎著作集』（研究社出版、1968-69）の副題がそのまま物語っている。<sup>12</sup>そして恐らくは4,000点を下回らない文章と、単著・共著併せて200冊近くになる書物を残して、

### Ⅲ. 既存の著作目録について

福原麟太郎の場合、普段での筆の進み具合はなめらかなほうであったようだ。こんなエピソードが『英文学小論』（吾妻書房、1958）の「あとがき」に記録されている。彼は1955年4～5月にNHK第二放送の教養大学講座で「英文学の話」を9回にわたって講ずることになっていたが、「私はそのテキストの原稿を書くことを締切の前日まで忘れて居り、その頃は神戸大学文学部へ集中講義に行っていたのだが、ふと思いついて、御影の宿屋で殆ど夜を徹するほど書き続けて、翌朝速達で東京に送った」ことがあったらしい。それが再録されている『英文学小論』で字数を数えたら、400字詰にして20枚の分量であった。

執筆速度についても、彼は「この世に生きること（その一）」（1952）で語っており、それによると「私は、三十枚アポロチアを書けといはれると、實に従順に、それに従ふ。…自分はどんなに急いでも、一時間三枚以上書けないのだから、三十枚は十時間である。一日は二時間以内しか割けないのだから、五日はかかるといふ風に計算し、しかも、三十枚といはれば大抵三十枚目の最後の行で、何とかつづめがつく習慣にこのごろはなつて来た。そして期限には、とにかく形だけは出来てゐる。われながら、いたはしいほど、忠實に約束を守る」といった風で、途中で筆が行き詰まるかもしれないという不安はあまり覚えなかったであろう。<sup>13</sup>

その健筆ぶりたるや、タイミングによっては同日に10件を超える文章が公刊されたことも時折あり、1957年1月1日の場合などは少なくとも13の新聞・雑誌が彼の文章を掲載していた。勿論これは極端な場合であるが、86年の生涯を通して彼が産み出してきた文章の総量は先に触れたように夥しいものであった。それらの文章の存在を忘却の淵から救い出し、後世に伝えて行くためには、できる限り網羅的な目録を作っておく必要があろう。そ

福原は1981(昭和56)年1月18日に86歳の生涯を閉じた。その人望の高さについても推して知るべしで、1987年に刊行された『福原麟太郎追悼録』（其刊行会）は、各界から寄せられた文章を143篇も集めている。その後1999年に福山市はふくやま文学館をオープンさせて井伏鱒二とともに福原の功績を顕彰している。

して網羅的であるということは、次の例が示すように、点数が増えるとともに誤認や混乱が文献情報に紛れ込んでくる危険も増すことになるので、現物の確認を踏まえた精確な記述を目録に実現させなくてはならないという意味でもある。

例えば1946年11月1日に発表された「思ひ出のクリスマス：霧のロンドン」の場合、同じ文章が「霧のロンドン」と題して3箇所転載されたが、「歳末のロンドン」と改題され転載された例も1件ある。それらが「ロンドンの霧」と題された別の文章と併載された事例が2度あった。単行書でも類似したタイトルに注意を払わなくてはならない。読者はふつう『英文学の輪廓』（研究社、1923）と『イギリス文学の輪郭』（研究社出版、1954）とを意識して区別しないであろうが、現物を照合してみるとそれらが別物であることが判る。『メリ・イングランド』（文教閣、1934）には、後半部の収録内容を異にする吾妻書房版（1955）が存在する。『英文学研究法』も内容を変えた数ヴァージョン（英語英文學刊行會、1934；新月社、1949；同、1952；南雲堂、1963；同、1974）が出されてきている。このような場合も織り込んで記述された目録さえ整備しておけば、将来何らかの文章や書籍を探索する際にも効率よい処理を計れることであろう。

しかも福原は、「新聞雑誌の執筆要請をことわったことはほとんどないように思われる」<sup>14</sup>と目されるくらいに筆まめであったから、地方の学校新聞や同人誌のような極めてマイナーな掲載先にも文章を寄稿していた。ところが現在では、そうした文章を複写して集めようとしても、所蔵をたどれなくなってしまった刊行物が多いことに驚かされる。地方紙や小規模な同人誌を収集・保存する努力が、当事者はもとより、国立国会図書館においても積極的にはなされてこなかったことも影響してい

<sup>12</sup>すなわち、第1巻『シェイクスピア』、第2巻『ジョンソン大博士』、第3巻『トマス・グレイ研究』、第4巻『評伝チャールズ・ラム』、第5巻『随筆Ⅰ：旅・人』、第6巻『随筆Ⅱ：身辺』、第7巻『随筆Ⅲ：人生・読書』、第8巻『随筆Ⅳ：日記・劇評』、第9巻『英語教育論』、第10巻『英文学評論』、第11巻『イギリス人』、第12巻『英文学の歴史』と並び、合せて7,000頁くらいになるが、それでも福原が発表してきた文章の一部でしかない。

<sup>13</sup>先述の対談「英文学の人生」で、福原は「…研究しようとするものに関する勉強を、一日に二時間ずつやる…。…僕は大体[夜の]12時から2時までという時間はしょっちゅう勉強していました。」と語っている。

<sup>14</sup>『福山の文学第5集：ふくやま文学館所蔵資料紹介』（ふくやま文学館、2004）に「福原麟太郎」（pp. 46-61）の章があり、そのp. 54に見られる磯貝秀夫による所感。氏は開館以来10年にわたって同館の館長を勤められた。

る。だからと言って入手困難のまま放置しておけば、日を経るに従って福原の文章の所在が曖昧化するであろうし、事態はますます悪化していくであろう。

こうした状況に鑑みても、福原が活字化した全文章を捕捉した目録がまとめられる意義は十分にあるはずだと、筆者は感じているのである。しかしそれは大部の目録になるであろうし、福原は今を時めく作家ではなく、出版しても利益につながらない英文学者兼随筆家でしかないから、出版社の企画にはどうしても馴染みにくいであろう。であればこそ利害にとらわれない個人の努力にも出番がありそうに思う。もちろん過去には何人かの個人が、同様な必要性を認識し努力した成果を発表してきている。それら先人たちの存在なくしては、筆者が網羅的な目録をまとめようとは思わなかったであろう。それで、受けた恩恵に感謝しつつ、既存する数点の福原麟太郎の著作目録を、以下に掲げて紹介しておきたい。

① 福原自身の筆になるもので、上述の『近代の英文学』（1955）刊行に際して用意された「年譜」（pp. 515-21）である。昭和初期頃までの記述では人生上の事件を回顧的に語った、あたかも自伝執筆を想定したメモであるかのようなコメントが主になっている。他所では得られない情報も織り込まれてはいるが、それ以降の記述は主要著書の書名や社会的事件を並べただけの年表になり、1955年11月に『年々歳々』（朝日新聞社）刊行との記述で終わっている。この「年譜」が『福原麟太郎著作集 8：日記・芸能』（研究社出版、1969）に転載された際には、本人により1968年の記述まで書き継がれたらしいが、全体にわたって交友関係や雑誌掲載の文章などについて僅かに増補されたに過ぎない（pp. 592-607）。そしてこの『著作集 8』のためには「著作目録」（pp. 608-28）が別に作成されていて、彼の152点の著述上の業績を時系列でたどれるようになっていて、1981年になって福原が没すると、今度は『福原麟太郎随想全集 8：日記・書簡』（福武書店、1982）に、編集者が1981年までを書き加え、関連した文章から味わい深い箇所を欄外に引用した「年譜」（pp. 339-59）が収録されている。それらをまとめて①とする。

② ふくやま文学館の開設準備に参画した共立女子大学教授の中村義勝が作成し、『天才について』（講談社学芸文庫、1990）に掲載したものがあつた。やはり①同様に「年譜：福原麟太郎」（pp. 373-89）と「著書目録：福原麟太郎」（pp. 390-95）との二部構成になっている。その「著書目録」では単行本91点、文庫本8点、選集類は26点、翻訳書16点と形態別のリストにして合計141点を挙げていたが、その後『命なりけり』（講談社学芸文庫、1992）に掲載された「著書目録」では、単行本97点、文庫本10点、選集類25点、翻訳書16点の合計148点と増補の程度は僅かではかない。しかし「年譜」のほうは、①をベースとしながらも、福原が関わった雑誌や雑誌記事などの

情報を掘り起こして補足した約30枚の力作であつた。福原が13歳であつた1907（明治40）年の記述では、福原自筆の記述に続けて、「この頃、スケッチブックを持って、近くの風景などをよく写生した。竹久夢二の絵は「シマリがない。真面目なといった点がない」として好きではなかつた。このスケッチブックは残っている」といったコメントも見られる。

③ 同じく「ふくやま文学館と福原麟太郎」と題され、『英米文学評論』の第28号（英米文学評論研究会、2000）に掲載された、中村義勝によるA5判39頁の資料がある。前半部は、ふくやま文学館に遺族から寄贈された遺品等ゆかりの品々を整理した際の記録で、所蔵品を講義ノート、学生時代のノート、自筆原稿、読書日記、自筆の著述目録、録音テープ、英文手紙、初版本、創刊号、愛蔵書の10カテゴリーに分類しながら、タイトルや枚数などの情報を添えている。後半部の「福原麟太郎略年譜」も②に膨らみを持たせた内容になっており、全体として他をもつて代え難い資料なのであるが、掲載された先が限られたメンバーのための同人誌であるらしく、ふくやま文学館もそれを1部しか所蔵していない。他に収蔵している図書館もないようで、惜しいことである。

④ 笠原勝朗の『昭和を彩った英文学者たち：生涯と書誌』（沖積舎、1996）では70頁分が福原に充てられている。すなわち英文学研究領域での福原の業績をほぼ年代順に解説した20枚の「福原麟太郎」（pp. 239-45）を収めているが、そのうち福原の文学観を凝縮させた3枚分と、福原の筆で『英語青年』に連載された「英学時評」について「福原は大ぜいの英学研究者—新旧を問はず、の多くの著書、業績を実に綿密に読み、検討し意見を述べているのが、いつでも暖かい思いやりのある書き方にその特色があり、いかなる人からでもその美点を見抜く才能を身に付けていた」と紹介する3枚分には説得力がある。「福原麟太郎年譜」（pp. 246-49）は大雑把なものでしかない。「著書一覧」（pp. 250-55）は184点を挙げており、そこから翻訳書を除いた単行本のそれぞれの目次内容が後続の「福原麟太郎書誌」（pp. 256-310）に機械的に書き写されている。全体で500頁の大型本であり価格が25,000円（本体価格）もするので、福原の業績をこれからの世代に伝播するための媒体とはなりにくいであろう。

⑤ これが時期的にはいちばん新しい目録で、誠之館出身の村上篤美がまとめた『福原麟太郎芸文書誌』（私家版、2005）である。福原による各著書に『福原麟太郎著作集』全12巻と『福原麟太郎随想全集』全8巻を加えた90点を刊行順に記述した書誌で、それぞれ左頁には表紙の複写と書誌情報と目次、右頁にはコメント類を添える2頁構成である。本書を無造作に開いて右頁に目をやれば、各著書に込められたと思しき福原の思いや出版の背景などが引用もまじえて伝わってくる。そのまま視線

を左頁に移せば、転写された目次を通して内容のあらましを窺うことができるようになっている。目次に並べられている各作品のタイトルを合算すると2,000を下らないそうである。

村上版で未入手となっている『叡智の文学』（研究社、1940）、『新しい家』（研究社、1942）、『猫』（宝文館、1951）、『イギリス文学の輪郭』（研究社選書、1954）、『シェイクスピア講演』（講談社学術文庫、1982）については後日を期するにしても、この90点を中村義勝が作成した「著書目録」ちゅうの148点と照合してみると、村上版が取り上げていない書名に一定の傾向を見出すことができる。すなわち『英文学の輪廓』（1923）、『詩心巡禮』（研究社、1924）、『近代の英文学』（研究社、1926）、『英文学を如何に読むか』（研究社、1927）、『英文学の修業』（研究社、1929）、*An Elegy Written in a Country Churchyard*（Edward Walters, 1933）のような、福原がまだ若手研究者であった頃に発表してきた30点近い英文学方面の研究業績が挙げられていないことである。そして数少ない翻訳書も触れられていない。誠之館を始めとする高校に現在通っている世代を、随筆を主体とした福原文学の世界に誘いたいとの意図でまとめられたからであろう。もしB5判180頁という体裁をポケットに入るサイズに縮小し、私家版ではなくて書籍として流通させることができれば、福原文学の一端を知らしめるためのガイドブックたり得たかもしれない。

⑥最後に挙げなくてはならないのが、③において「自筆の著述目録」として言及されていた、そして福原が折々に書き足してきた自筆の「福原麟太郎述作目録」である。筆者（藤井）は先述の『ふくやま文学館所蔵資料紹介』の記述を通して初めてその存在を知ったのである

#### IV. 藤井版『福原麟太郎著作目録』への準備作業

福原の著作目録として筆者が把握しているのは、単行書に添えられた短い経歴紹介を別にすれば、上述の①～⑥なのであるが、それぞれに一長一短があるように思われる。福原文学の発掘と復活と普及と保存という筆者の目標を実現するためには網羅性と精確度の向上が不可欠であろう。網羅性では⑥が理想に近いのであるが、公刊を前提に作成されたものではなく、そのためにタイトルの記述や連載物での公刊日に精確さを欠くことが多い。また転載先や短文類などの情報に遺漏もないではない。

が、A5判で2冊の分厚いノートは「単行本目録」と「新聞雑誌寄稿記録」に分けられていて、その大部分を占める後者には、1907（明治40）年から1976（昭和51）年1月に到るまでに福原が寄稿した2,000件以上のタイトルが公刊日順に記録されている。福原が几帳面な性格であったことがストレートに伝わってくる。このノートが詳細にして唯一無二の情報源になることは一目瞭然であったが、それだからこそ大切に保存されており、門外不出でもあり複写も許されなかった。しかし幸いに閲覧することは認められたので、筆者は一週間を掛けて必要な情報を書き写すことができた。

ノートとは別に、紙が巻物状に貼り足された1946～76年の目録もあり、筆者（藤井）はこの目録を「入稿メモ」と呼んでノート判「述作目録」と区別するようにしている。そこには各文章について入稿日と枚数と思しき情報が記録されており、時には年間執筆総枚数と総件数とが書き添えられた年も見受けられる。<sup>15</sup> ノート判には記録されていない広告文らしき数十文字規模のタイトルも見られるので、恐らく原稿料が支払われるまでの控えとして用いられたのであろう。ただし、どちらの目録も個人的用途が想定されていたせいか、文字が崩されていて筆者などは読み解くのに苦勞させられ、残念ながら4～5箇所は判読不能のままである。ところが同じようなことを考える人間は居るもので、後日筆者はこの目録を丹念に筆写した原稿のコピーを入手できたのである。制作者は小土井敏隆という福山市議会議員も務めたことのある福原の愛読者であったらしい。判読不能であった箇所を早速照合してみたが、やはりそうした箇所はなかなか読めないようだ。<sup>16</sup>

既存の目録を横断的に参照してみると、網羅性により改善の余地があるようにも思われる。単行書にそうした例を示すために、岡倉由三郎注釈による研究社英文学叢書ちゅうの『New Arabian Nights By Robert Louis Stevenson』（1921）、日本美術院編『天心先生歐文著書抄譯』（1922）、岡倉由三郎著『英語教育の目的と價值』（研究社、1936）を挙げてみたい。④は福原が『New Arabian Nights』の改訂に携わったことを1947年の改訂版タイトル・ページに拠って記述しているが、福原本人

<sup>15</sup>「入稿メモ」に数字が残されている年について、年ごとの総枚数や総件数を転記しておこう。1947年：425 ½枚（45件）、'49：679（60）、'50：573（75）、'51：482 ½（88）、'52：638 ½（99）、'53：812（163）、'54：561（91）、'55：478 ¾（74）、'56：672（167）、'57：965（199）、'58：866（123）、'59：（171）、'60：（145）、'61：（141）、'62：（111）、'63：（107）、'64：（105）、'68：（72）、'69：（49）、'70：（37）、'71：（39）、'72：（61）。これらだけでも計2,222件に及んでいるが、それでも福原の筆の勢いを想像するための目安程度のものでしかない。

<sup>16</sup>福山の同人誌『備後春秋』2002年12月号に掲載された草原昭喜「叡智の文壇学者福原麟太郎先生：第20章」に拠る。小土井氏から提供されたコピーを草原氏が誠之館同総会に寄贈され、そのまたコピーが同総会の三村敏征氏により筆者宛送付されて、筆者はその存在を知ることになった。各位にお礼を申し上げます。

は1921年当初から「岡倉先生の*New Arabian Night*でした、私は半分やりました」と、1959年6-7月号の『英語研究』（研究社出版）に掲載された座談会で述懐している。また『天心先生…』のどこにも福原の名は見られないが、福原の業績であることを記述しているのは②④⑥だけである。<sup>17</sup>あるいは「序」に「福原麟太郎氏に一切を託することにした」と明記されているにもかかわらず『英語教育の目的と価値』に触れた目録はない。無数にも思える記事・短文類での遺漏状況については推して知るべしであろう。やはり、より網羅的な目録を筆者（藤井）が作ることに幾分かの意味は見出せそうである。それでは、筆者としてはどのような目録を目指すべきか。この2～3年のあいだ福原の文章を集めていて、筆者がイメージするようになった『福原麟太郎著作目録』を、以下に雑感風に綴ってみようと思う。

### 1. タイトルをリスト化する

『福原麟太郎著作目録』の守備範囲として筆者が思い描いているのは、福原の筆になる文章のうち活字化されたものを可能な限り掘り起こして、収集し、個々の文章についての情報を精確に記述しておくことである。もちろん踏み込んだ福原研究には、③に挙げられている草稿やノート類の閲覧と分析が望まれようが、所蔵先のふくやま文学館では利用者を受け入れる態勢がまだ整っていないらしいので、将来において「草稿目録」のようなものが作成されるのを待つことになろう。したがって現時点で筆者が実現を目指し得る目録は、福原が何時何処に何についての文章を発表（活字化）したかに関する情報の集積に限られてくる。

そうした方向性を定めてから、筆者が取りかかった最初の作業は、文章のタイトルを発表年月日順に並べたリストである。先ず①と②に挙げられている刊行書を集め、それに付記されている初出の情報をリストに織り込んでいくことから始めた。いかにも几帳面な福原らしく、彼は処女出版の時から（詳しさと精確さにばらつきはあるものの）初出情報の表示を励行していたので、単行書に再録された文章については概ねそれらの初出紙誌まで遡ることができた。そうすることによって、⑤も教えているように、2,000件前後のタイトルを初出でリスト化したことになる。次に、彼が40年近く関わってきた『英語青年』の『総索引』（研究社出版、1999）で本名のほかペンネームからもタイトルを拾い、戦後以来の文献を集めて5年毎に刊行されてきている『英米文学研究文

献要覧』（日外アソシエーツ、1977～）をチェックし、②が教える掲載雑誌類の総索引や、諸々の書誌、そしてインターネットにより全国の図書館の蔵書目録や各種のデータベースなどを参照して、得られたタイトルと書誌情報をそのリストに順次追加していった。

こうして300頁にプリントアウトされたリストを携えて、⑥すなわち福原自筆の「述作目録」を閲覧するために、ふくやま文学館を訪れたのは2008年夏であった。「述作目録」に新たなタイトルや初出情報を見出せば逐一それらを筆写した。その後それらの結果を踏まえて、初出情報を現物で確認するために、発表された当初の文章を集める作業に筆者は着手することになった。その作業において、「述作目録」から得られた情報が授けとなったケースを2～3例紹介しよう。

福原はG. K. Chestertonの"The Secret Garden"を邦訳したことがあり、それが「教育何とかといふ新聞」に連載されたことが、彼の注釈による『The Innocence of Father Brown』（研究社、1929）の序文に言及されていたので、筆者はそれをリストに組み入れた。しかしそれでは情報が足りないので「述作目録」を参照してみたら、1918年11月25日から翌3月17日まで『教育新聞』に「庭園の怪」を執筆したとあった。それを典拠に福岡大学図書館で調査してもらったところ、それは「新探偵小説：庭園の怪：ギルバト・キイス・チェスタトン氏作」として『教育新聞』（教育新聞社）の第37～53号に掲載されたとの報告を得た。この翻訳は単行書に再録されていないので、「述作目録」がなければ埋れてしまっていたであろう。<sup>18</sup>

編集者や出版社の姿勢に起因するのであろうが、再録書では初出情報が不精確であったり不十分なことがある。例えば「よき日々の學生」という短文の場合、再録先である『中流人の幸福』（角川新書、1957）には初出について「毎日」としかない。同様に『昔の町にて』（垂水書房、1957）では「『毎日新聞』昭和31年6月」、『天才について』（毎日新聞社、1972）には「昭和37年」とだけあって、要領を得ない。再び「述作目録」を参照すると、「太平に咲く藝文の花（よき日の学生時代）」が昭和31（1956）年でも昭和37（1962）年でもなく、なんと昭和30（1955）年の6月7日の『毎日新聞』と記録されていた。ただちに図書館に走り、その日付での掲載を確認することができた。

ペンネームで発表された文章を発掘する際にも「述作目録」がガイドブックになってくれる。<sup>19</sup>「述作目録」

<sup>17</sup> 筆者の所蔵本には、遊び紙に「父上様 この本の一二三頁までは 全部私の筆で出来たものです 麟太郎」と添え書きされている。182頁までとは、資料の引用を除く全文ということになる。

<sup>18</sup> 1929年の序文で、「某氏の紹介で、教育何とかといふ新聞へ連載された。然し誤植があつたり中途がぬけたりして非道かつた。」と述べているので、福原はそれを埋れさせたいと望んでいたかもしれない。

<sup>19</sup> 福原の筆名で複数回用いられたものをいくつか並べてみよう。Foolscap, P.P.P., R.F., Tachio, 大塚學人, (日下)英彦, 高桑生, 原の人, 礪川山人。

に、「味」(秋山徳蔵氏著作評) 1955年5月22日『サンデー毎日』とあり、同誌に確認すると、確かに『味』(東西文明社、1955)の書評が「あふるる人生哲学(A・6)」と題して掲載されていた。この(A・6)を手掛かりにすると、同誌6月12日号掲載の「ほん：自由な心を楽しむ(A・6)」が「述作目録」に「うらなり抄」の題で記録されている文章のことだと同定できる。あるいは1949~50年に『朝日新聞』に断続的に載った短文「無題(泉)」について、「述作目録」は20回分弱を記録しているが、(泉)名での「無題」は1949年だけで46回、1950年には50回も同紙に登場しているの、おそらく逐一記録することがさすがの福原も億劫になったのであろう。<sup>20</sup>

また『英語青年』の編集を任されていた福原は、長期間にわたって同誌に埋め草を書かざるを得なかったようで、そのほとんどが無署名の短文かペンネームによる記事であった。商業誌としての体裁上数名で執筆していることを装う必要があったろうから、彼は複数のペンネームを用いていた。ある程度までは『総索引』が教えてくれるが、たまに「入稿メモ」が役立つくれる場合もあり、例えば『英語青年』の1959年1月号に見られる広告文「英語の活動態が一目瞭然：英語活用法の理想的辞典」については、「理想的な英語活用法辞典」1枚を1958年10月6日に入稿した旨の記録が手掛かりになった。しかしデスクで書き散らした無署名の埋め草をいちいち「述作目録」に記録するはずもなく、それらの掘り起こしについては、内的証拠による同定結果を採用する方針変更と、少なくとも40年分の『英語青年』の全頁に目を通す根気とが必要になるので、筆者としては見送らざるを得ないと考えている。

このように他をもつて代え難い「述作目録」だけに、筆者は数度ふくやま文学館を訪れ<sup>21</sup>、ひたすらにその筆写に努めた結果、これ以上は望めないほど充実したリストを作成することができたと自負している。それはまだタイトルと書誌情報を記述しただけのリストであるが、500頁ほどの規模に膨らんでいた。それほど得るところが多かった「述作目録」にも、残念ながら問題点がないわけでもないことが追いつ追いつ判ってきた。

まず、記録が1976年1月で途絶えていることが新目録作成にあたっての不安材料になる。81歳以降の5年間の執筆活動の様子が直接的に伝わってこないからである。しかし晩年には永らく体調を崩していたらしいので、「述作目録」が記録されなくなってから以降に執筆された文

章の量はあまり多くはなかったであろう。晩年5年間に発表された福原名の文章を筆者は30点ほど集めているが、そのほとんどが懐旧談の随筆か広告用推薦文、または旧稿の再掲であって、種々の書誌を参照してみても英文学領域に関わる論考が執筆されていた形跡は見られない。僅かに、齋藤勇を相手に小津次郎の司会で1977年10月10日に催された座談会「日本英文学会五十年の歩み」を活字化した文章あたりが比較的最近のそうした例であろうか。

また「述作目録」に記録されていた誤った情報に振り回されることもしばしばである。これは苦勞させられた例であるが、「古典の発見(英米文学の翻譯)」と題された文章を『時事新報』の1949年7月21日号に寄稿と記録されていた。<sup>22</sup>『時事新報』の当該号には掲載されておらず、その前後を手当たり次第にめぐってみても記事を見出せなかった。読んでみたいと思わせるタイトルではあるが、どの単行書にも再録されることがなかったので、この手掛かりで発見できなければこの文章は失われてしまうことになる。諦めるまえに念のためと思い、国会図書館のホームページから利用できる「占領期新聞・雑誌情報データベース」を検索してみたところ、「文化：古典の発見」という記事がヒットした。コピーを取り寄せてみたところ、福原の名があり、副題でも「述作目録」の記述と一致した。それは『時事新報』ではなく、プランゲ文庫にしか所蔵されていない『佐世保時事新聞』の1949年7月30日号の記事のことだったのである。

日付での誤記も「述作目録」にはかなり見受けられる。何本かをまとめて後日記入することもあったのであろう。また入稿直後に発行予定日を見込んで記録したと思われる場合もある。「述作目録」の1965年の記述に「如是我聞 心5月号」とあったので、雑誌『心』(心編輯所)の当該号を調べたところ掲載がなかった。結局翌1966年の同誌5月号に掲載されていた。再録先の『著作集6』(1969)でも1965年を初出と表示しているし、『心』の「総目次」でも何故かこの記事が抜け落ちている。<sup>23</sup>福原の文章を再録する際に編集の当事者たちが初出に遡ってこうした誤記を修正する手間を惜しむと、「述作目録」に由来する誤情報がそのまま後世に継承されてしまい、結果として現物が行方不明になってしまうことにもなりかねない。

そして⑥が必ずしも網羅的ではないことも忘れてはならない。『英語青年』への埋め草はほとんど記録されて

<sup>20</sup> 他人の筆が混ざっていた可能性も否定できないが、当時の印刷は不明瞭なため、泉という字は福原の原という字のつもりであったかも知れない。少なくとも初回については原と読める。

<sup>21</sup> ふくやま文学館の皆様、とりわけ『ふくやま文学館所蔵資料紹介』の執筆者でもあられる小野雲母子氏、そして福原ゆかりの場所を案内してくださった寺岡洋行氏にお世話になりました。

<sup>22</sup> 『産経新聞』や『産経時事』に掲載された記事を、それらの前身紙である『時事新報』として「述作目録」に記録される場合もある。個人用の手控えに馴染んだ紙名で記述するのは自然であろう。

<sup>23</sup> 上述の2件の調査およびその他でも、福岡大学図書館の塩澄文子、小柳巖、加藤恵里の三氏に援けて頂くが多かった。



いないし、中野好夫著『英文学夜ばなし』(新潮選書、1971)の裏表紙に見られる1枚分の推薦文は「入稿メモ」にさえ記録されていない。共立女子大学の『文藝研究』(1963)掲載の「坪内逍遙の没理想論」は、「さきの戦争中…研究報告として出したものの草稿」であったせいか、掲載の事実が記録されていない。また「述作目録」には、福原の名を冠した選集が編集される度に、再録予定のタイトルに選集名が識別できるマークが福原の手で付されているが、福原以外の人物が編著者を務めた選集類に単発的に転載された文章にはマークが付されていないようである。

## 2. 現物収集へのこだわり

タイトルのリスト化までの作業は、それを例えば扇子造りでイメージするならば、骨を集めて要で束ねるといった段階でしかない。続いて骨に貼って扇面にするための紙を用意しなくてはならない。すなわち文章の現物入手する作業である。単行書や作品集に再録された文章でじゅうぶんではないか、と考える向きもあるかも知れない。よりあとの時代に印刷されたテキストのほうが著者の意図をより反映していると考えののも道理であろう。しかし福原は再録にあたって改筆をすることは少なかったし、加筆した場合にはそう付記することが多かった。福原の業績を年表式に記述しようとそもそも筆者が構想するのも、福原という人物像の変化を著作物を通して時間の流れに沿って観察してみたいからであった。加筆や改筆があればそれ自体が示唆的な意味を持つと考え別途立項するつもりになっているからである。それに、これは筆者がJohnsonの『文献目録』をまとめて得られた教訓なのでもあるが、初出の文献を自分の目で確認することで初めて得られる情報というものも予想の他に多いからなのである。

ここでも実例を2～3を挙げてみたい。『野方閑居の記』(新潮社、1964)に「ほんとうの人間」と題されたエッセイが収録されているが、それに関する初出の表示はない。再録先の『福原麟太郎随想全集1』(1982)は『野方閑居の記』を初出としている。幸いにも筆者は「述作目録」に情報を得られたので、『毎日新聞』の1962年3月10日号夕刊に「ほんとうの人間」の掲載を確認することができた。現物へのこだわりがなければ、初出は『野方閑居の記』のみであったろう。

あるいは、『人間天国』(文藝春秋新社、1961)や『福

原麟太郎随想全集3』(1982)に再録されている「つらあかり」が、初出とされた『讀賣新聞』の1959年6月17日夕刊に掲載されていない。しかし同日号に載っている「東西新旧」と本文を突き合わせてみたら、「東西新旧」が再録時に「つらあかり」と改題されていたことが判明した。しかも同文章が『明日に新しく』(帖面舎、1962)では「東西新旧」のタイトルで再録されているのである。初出でチェックしていなかったら、両タイトルが別文章であるかのように誤解され続けたであろう。

初出時のテキストとの照合が必須になる場合もある。福原は1954年6月10～12日にラジオで「シェイクスピアの言葉から」を講じ、その速記録が雑誌『あるびよん』(あるびよん・くらぶ)の1954年7月号に「シェイクスピアの智慧」と題して掲載された。いっぽう『シェイクスピア講演』(大修館書店、1961)所収の「シェイクスピアの言葉から」にも速記録である旨が明記されている。両者は表現に微妙な違いはあるものの、実質的には同一文章とみなしてよい。ところが『福原麟太郎著作集』の第1巻(1968)が後者を再録しているにもかかわらず、同第11巻(1968)は前者を別物として掲載している。編集者が初出に遡ってテキストを照合していたら、筆者(藤井)と同じ結論に至ったはずである。

このような照合の場合に備えて、ほぼ網羅的段階にあったタイトル・リストを頼りに、筆者は2008年頃から福原による文章を新聞・雑誌に集め始めた。最初は福岡大学図書館に所蔵されている主要な文芸誌、全国紙、福岡周辺の地方紙から集め、つぎにWebcat Plusから書籍や雑誌の所蔵情報を得て、図書館の相互貸借係に取り寄せを依頼した。<sup>24</sup> 日本近代文学館もオンラインで検索できる雑誌目録を公開している。<sup>25</sup> 新聞や雑誌については、国会図書館のホームページで検索をして繰り返しコピーを郵送してもらうことができたが、新聞の何面に掲載されているかを指定できないまま申し込んで度々しかられた。<sup>26</sup> 休暇を利用するなどして国会図書館の新聞雑誌閲覧室に通うこともした。しかし何と言っても、インターネットの「日本の古本屋」なくしては、書籍類をこれほど網羅的に集めることはできなかったはずである。<sup>27</sup> このようにして筆者は⑥およびそれ以外に記録されていた書籍、雑誌記事、新聞記事等々のうち、およそ9割を入手し得たと考えている。

その結果、新聞記事のコピーを1,500枚以上集めたが、こうした手間を掛けたからこそその成果もある。1956年

<sup>24</sup> Webcat Plus (<http://webcatplus.nii.ac.jp/>) は、大学や公共図書館などが所蔵資料を登録しているデータベースで、自由に検索できるが、資料の取り寄せと利用には図書館の相互貸借係に申し込む必要がある。

<sup>25</sup> 日本近代文学館 (<http://www.bungakukan.or.jp/>) では、複写料が1枚¥100と安くはないが、何かと柔軟な対応をしてくれるし、文学館の会に加入すると割引になる。

<sup>26</sup> 国立国会図書館 (<http://www.ndl.go.jp/>) でも、利用者登録をしてID番号をもらっておくと、オンラインで検索することや複写を依頼することが可能で、後払いで自宅宛に郵送してもらえる。

<sup>27</sup> 「日本の古本屋」(<http://www.kosho.or.jp/servlet/top>) で福原麟太郎と検索すると、常時1,000点以上が書名のあいうえお順に並んでいるので、コンディションや売価を比較してから発注できる。

11月6日～翌2月15日に『西日本新聞』に100回掲載された「南窓雑筆」は、『命なりけり』(文藝春秋新社, 1957)に「爐邊」および「遍歴」として再録されたことになっているが、再録に際して各回の初出時のタイトルが伏せられてしまった。そこで『西日本新聞』で照合してみたところ、実際に再録されたのは71回分でしかなく、しかも掲載日順に並んでいないことが判明した。こうした作業をすればこそ、どのような内容が再録されなかったか、といった新たな視点での読み直しが可能になってくるはずである。

一般に流通していなかった印刷物に掲載された文章も⑥には数々記録されている。しかし地方の同人誌や学内通信や企業の宣伝冊子などでは、発行母体自体が消滅したり代替わりしている場合が多いし、当事者が保存していない場合もあったりする。福原は東京高等師範学校や東京教育大学在職中に英文教室の学生や野球部など同好会の通信類に執筆していたようであるが、つくば大学図書館にはそれらが全くと言っていいほど保存されていなかった。おそらくガリ版刷りのチラシのような印刷物であつたらうから、古書市場に出ることも期待できない。

いっぽう出版社の内容見本の場合には古書市場に出る可能性が多少はあり、筆者はインターネットを利用してこれまでに約20点を集めた。例えば加藤楸邨が短文「眼中雪」(1982)のなかで「全集を推す文として書いて下さったのは先生のお亡くなりになるすぐ前のこと」と記しているが、『加藤楸邨全集』の初回配本巻(講談社, 1980)にその文章を見出せなかったので、内容見本に掲載された可能性もあり、気長に捜せばそれを入手できるかもしれない。

月報(あるいは付録の小冊子)もまた散逸しやすいので、勤務先の図書館でも空振りに終ることが多い。

Webcat Plusもその有無には言及してくれないから、成り行き次第の運任せで当該巻を取り寄せてみたりして探すことになる。一冊の月報のために全集の揃いを購入すべきか悩んだことも一度や二度ではない。目下筆者は『世界大衆文學全集第18巻: 寶島他三篇』(改造社, 1928)の月報に掲載されているはずの「スティヴンスンの小説」が入手できずヤキモキしている。何しろ福原が20歳の頃から興味を示していたR. L. Stevensonを論じた文章でありながら再録されたことがなく、筆者としては興味津々なのであるが、月報の所蔵先が見つからず、古書市場に出るのを待つしかない状況にある。

表紙や帯に寄せられた推薦文でも、それらが図書館で保存されることが一層少ないために苦勞させられる。特に「入稿メモ」は原稿料受領までの備忘録らしいので、記述が簡潔に過ぎて掲載先を特定できない場合が多くある。苦勞が実った数少ない例であるが、「入稿メモ」によると1974年2月13日に「選書推薦文」100字を新潮社に入稿したらしいので、筆者はこの日付以降に刊行された新潮選書を参照する必要に迫られた。普通カバーを剥いでから配架する図書館は絶望的。福原の没後30年の現在、現行版のカバーも様変わりしていて期待できない。古書で手当たり次第に買い集めるしかない。結局、空振りを繰り返したあと、それらの1冊に同年10月の新刊を伝える新潮選書の広告が挟み込まれているのに遭遇し、そこに辻邦生のものと並んで福原の100字の推薦文にたどり着くことができた。

以上述べたように、苦勞しながらも文章の現物を集めてきたが、不首尾に終わった探索も数々ある。執筆中の『著作目録』では、発見を後日に託したいとの気持を込めて、⑥から得られた貴重な(しかし不精確かも知れない)情報を記録にとどめておくつもりである。

## V. 藤井版『著作目録』で想定されている記述スタイル

筆者が構想している目録においては、福原麟太郎が活字化したすべての文章が対象とされ、それらが発表された年月日順に並べられ、書誌情報が記述され、内容に則したコメントも添えられるであろう。さらに、経歴上の主要事についても折りに触れて言及され、活字化が予想される研究発表や講演についても入手できた限りの情報が書き込まれることになる。しかし福原を論じた文献については、その規模すら想像できないので、積極的に集めるまではしないが、目に付いたものを「福原論」と表示して、目録に織り込んでいくことになろう。福原の文章を彼が書いてきた順序で通読するための環境をほぼ整え終った筆者としては、これから福原の著述家としての生涯を追体験させてもらえそうな期待感に目下興奮を禁じ得ない次第である。

### 1. 文献番号について

先にまとめた『日本におけるジョンソンおよびボズウェル文献目録』では、5桁の文献番号を考案した。ここでは前3桁には文献が発表された西暦年の下3桁をあて、4桁目は発行月(1~9, X=10月, Y=11月, Z=12月, &=不明)、5桁目には同月に発表された複数の文献を識別する記号(1~9, a, b, c...)をあてて、項目の加除が常時容易にできるよう工夫した。またこの文献番号で索引を作成することにより、項目毎に集められた関連する文献について時系列上の分布状況を読み取れるメリットがある。それで『福原麟太郎著作目録』でも同様に文献番号を振るつもりになっているが、先にも触れたように、一日に10件も文章が公刊されることもあったりしたので、月単位の文献番号では同一番号の数が著しく多くなり、識別番号で参照するにしてもまだるっこしさが付

きまとうことになる。しかし日にちまで織り込むとなると、年月日の表示だけで最低6桁が必要になってくる。効率的な参照を実現するためにも文献番号の桁は少ないほうがよいが、同じ6桁の文献番号に10件をカバーさせられるか。あるいは識別用に更に1桁を加えて7桁にしようか、目下のところ思案中である。<sup>28</sup>

とりあえず6桁で実験してみようと、識別番号なしの文献番号でタイトルのリストを作って、参照に際して文献の取り違えが起こらないか様子を見ることにした。執筆することになるコメントには、各文章の初出が何時であり、再録先が何時のどの出版物かといった情報も含まれるが、福原の文章の場合には再録されるケースが極めて多いので、簡潔・確実に参照先を特定できるかどうかを見極めようとするためである。

その辺の感触を占えそうな事例として、『この国を見よ』（大修館書店、1961）所収のうち初出・再録が同一日になっている2本の文章に注目してみよう。

「政治と文化人」pp. 25-29. 【初出：958512】

【再録：982715】

「この国を見よ」pp. 29-32. 【初出：958512】

【再録：982715】

これで初出文献の同定が可能であろうか。参照先では次のよう立項されている。

【958512】「政治と文化人：なぜ代議士に出ようとしないうか」『読売新聞』1958年5月12日夕刊。

【958512】「この国を見よ」『産経時事』産業経済新聞東京本社 1958年5月12日。

それでは再録先を特定できるか参照してみると、同じ文献番号で次の2件に行き当たる。

【982715】『福原麟太郎随想全集6：この国を見よ』井伏鱒二・河盛好蔵・庄野潤三（編）福武書店 1982年7月15日。

【982715】福原論『福原麟太郎随想全集6：この国を見よ／月報』福武書店 1982年7月15日。

そのうち『随想全集6』の本体に下記の情報が記述されていて、文献を初出時から追録できることが判る。

「政治と文化人」pp. 23-27. 【初出：958512】

【再録：961925】

「この国を見よ」pp. 217-220. 【初出：958512】

【再録：961925】

あるいは、『福原麟太郎著作集』の第7巻（1969）に収録されている「堤中納言物語」と「饗庭篁村」は共に初出を『本棚の前の椅子』（文藝春秋新社、1959）としているから、どちらも同じ【初出：959525】となりそうであるが、実際に『本棚の前の椅子』で両文章の初出を参照してみると、前者は【初出：957410】に遡及することで本来の初出文献にたどり着くことができる。そして後者は1952年9月26日のNHK放送を【959525】で初めて活字化されたことが判る。ここでも両文章を識別できず混乱するという事態には立ち至らない。しかし『チャールズ・ラム傳』（垂水書房、1963）の場合には、普及版と限定版が同日付で発行されたので、どちらも【963X23】とナンバリングされてしまい両者を区別することができない。こうした場合には文献番号に何らかの但し書きを添えることが必要になる場合もあろう。それに、複数の文献を指し得るために但し書きでの識別を要求するような番号が、はたして目録の外でも客観性を保って通用するであろうか。そうしたことも気には掛かるが、本稿では雑感集であるための気楽さから、扱いやすい6桁の文献番号で表記していくことにする。

## 2. 初出・再録情報の必要性

各文章に関するコメントは初出時の項目においてのみ書き入れることを原則とする。しかし初出誌の閲覧ができない場合は、直近の再録先にコメントを添えることになる。そしてすべての再録情報も表示するであろう。したがって現在のプランでは再録先のそれぞれの項目でも、初出に関する情報は勿論のこと、他の再録先をも表示するようになる。例えば福原の吉田健一評を知りたいとする。作成を予定している「索引」から、『吉田健一著作集』のための内容見本（集英社、1978）に推薦文「吉田健一と英国」が掲載されたことを知るはずである。もっとも内容見本を集めた図書館は筆者の知る限りでは存在しない。しかし『目録』に再録情報がすべて表記されていれば、『吉田健一集成別巻』（集英社、1994）を図書館で閲覧すれば取り敢えず間に合いそうだと一瞬にして判る。あるいはもし福原の「アーサー・ウェーレー」を読みたいのであれば、他に再録先を捜すのは時間の無駄であって、初出誌である『観世会演能乃栞』（観世会）の1966年11月号を取り寄せるしか方法がないことも判るはずだ。

幸か不幸か、福原の文章はたびたび再録される傾向がある。執筆時での福原のメッセージを読もうとする筆者としては、可能な限り初出の形態で文章を読んでいくことにこだわっている。そのために全項目に初出と再録の情報を添えようかと考えている。どの項目でも初出文献

<sup>28</sup> タイトルをリスト化した段階では、これほど多数の文章が出てくるとは予想していなかったもので、日にちまで特定できる6桁の文献番号で執筆してきた。今から7桁化するとすると、相互参照のネットワークも巻き込む大作業になるので、二の足を踏んでしまう。

は原則 1 件の表示になるが、再録先の文献番号の羅列は一見したところ煩雑に思われようが、読み取りようによっては参考になる。どのくらい頻繁に再録されたのか、どの時期に再録されたのか、どういう性格の出版物に再録されたのか、逆にどういった文章の再録が少なかったのかについての情報源として『目録』を読むことも可能であろう。そうした興味的一端として、再録が多くなされた例を以下に並べてみたい。福原の再録に対する姿勢や福原文学における主調音を幾分かは想像できるはずである。

1934年9月28日初出の「四十歳の歌」→【再録:

935620, 942Z20, 953Y30, 957620, 958Y20, 964Y05, 969225, 973325, 981715, 981810, 982215, 987220】: 12箇所

1953年12月1日初出の「交友について」→【再録:

953Z20, 963Z10, 964Y05, 969625, 973325, 981810, 982215, 987220, 987610, 989725, 989418, 992X10】: 12箇所

1954年11月初出の「『雪』」→【再録: 956X20,

957620, 958Y20, 960320, 964Y05, 969X15, 972505, 981715, 981810, 982415, 987220, 987820, 990Y10】: 13箇所

1955年8月10日初出の「樽干し場」→【再録:

956X20, 957620, 958Y20, 960320, 961710, 964Y05, 969225, 972505, 979425, 981715, 981810, 982815, 987220, 987820, 990Y10】: 15箇所<sup>29</sup>

つまり、こうした再録情報を踏まえて文章を読み返すと、なるほどこうした話題が福原好みだったのだろうなあとか、こういう内容だと再録されない傾向にあるのかとか、この文章に彼の愛着の度合いが一塩なのだななどと想像されて、生身の福原に迫る手掛かりが得られた思いがする。例えば『朝日新聞』の1967年1月16～26日に連載された「折り折りの人」は全10回分をセットにしてその後4度再録されたが、「阿倍能成: 直言をはばからず」と「ヘンリー・バーゲン: 自分の目しか信じない」だけは5度再録(982815, 981715)されていた。逆に『放送文化』(日本放送協会)に1961年8～12月の5回で連載された「野方閑居の記」では、再録にあたって第3回の「ロンドンへの手紙」だけが仲間外れに遭っているようで、他の回が5度ずつ再録されているのに、第3回は

僅か2度しか再録されていない。同様に、『人生十二の智慧』(新潮社, 1953)に収められた12篇についても、再録実績を参照しながら、著者の筆遣いを味わってみるのも一興ではなかろうか。

### 3. 表示上のいくつかの約束事

各項目を記述するに際しては、『日本におけるジョンソンおよびボズウェル文献目録』で試みた形式を基本的には踏襲するが、それに捕われることなく、明解さを第一に考えて柔軟に対応していきたい。すなわち、各項目について次のような情報を記述したいと考えている。

【文献番号】 カテゴリー／福原ではない場合の執筆者名「文献名: 副題」ペンネーム等」【掲載文献の書名: 副題 全集等での巻名／月報等の表示】(英訳書名) 福原および彼以外の編・著者名／発行母体名 雑誌等での巻号(通巻) 東京以外ならその発行地: 発行機関名 発行年月日(叢書名) 当該箇所(判型／総頁数／売価／発行部数等の情報) コメント 【初出】【再録】【書評】【参考】<sup>30</sup>。

もちろん、福原自身の筆になる文章に執筆者名をいちいち記さない。つまり福原以外の執筆者名で始まる項目は、カテゴリーが福原論になることを含意している。なお執筆者名については敬称を略させて頂く。

上述のように、【文献番号】に続いて、文章のカテゴリーを示すラベルを時に応じて貼ってみるつもりでいる。いまのところ「談話」、「監修」、「編集」、「注釈」、「翻訳」、「推薦文」、「巻頭言」、「短文」、「評言」などが思いつく。文章の形態面と内容面という、カテゴリーとしての性格を異にする分類ラベルが併用されているが、文章の性格の特徴をイメージし易いラベルが項目の冒頭であれば、目録を参照する際に便利であろう。しかし分類することばかりに振り回されないようにしたい。

新聞・雑誌での連載記事や連載の注釈記事の記述について、それらの内容に一体性が強い場合、連載初回の発表日で立項し、まとめて単一項目として記述することがある。逆に、各回の内容が独立している記事については、連載そのものについて先ず項目化して全体像を示し、各回毎に発表日で独立した項目を立てる。例えば次のようにである。

■1957年10月1日～1957年10月30日 ■ 62～63歳 『熊本日日新聞』の夕刊に「流儀流儀」を30回執筆。その多くが『明日に新しく』(962Y25)に再

<sup>29</sup> 筆者は最近「樽干し場」の肉筆原稿を偶然に入手した。それが最も福原的な文章であることを、その再録回数で裏付けているとするならば、大変うれしい巡り合わせということになる。

<sup>30</sup> 【再録】は文章単位、【再刊】は書籍単位、【復刻】は原型のまま複製された資料というふうに分けて区別している。また【書評】や【参考】は目に触れた範囲内のものでしかなく、網羅的な情報ではない。

録されている。

【957X01】「流儀流儀 (1) : 書評」『熊本日日新聞』 1957年10月1日夕刊 p. 1.

【957X18】「流儀流儀 (18) : 帽子」『熊本日日新聞』 1957年10月18日夕刊 p. 1. 【再録】: 「ずきん」として『明日に新しく』(962Y25).

個別に記述することによって、連日掲載された「流儀流儀」のどの回が『明日に新しく』(帖面舎, 1962)で読むことができるか、すなわち初回の「書評」は原紙でしか読めないこと、第18回の「帽子」は「ずきん」と改題して再録されたことなどの詳細が判るのである。また一日一回発行の新聞に対しては朝／夕刊の区別を示さず、一日二回発行される新聞のうちの夕刊にはそう表示する。筆者はなるべく東京最終版で参照したが、新聞では発行地や版によって掲載頁(面)、発行日、朝夕、場合によっては見出しや本文にさへ異動が生じてしまうが、それはやむを得ないと考える。

すでに触れたように、年譜事項については深入りせずに、①を活かす程度で済ませ<sup>31</sup>、加えんとすれば福原の学術的業績に直結する事項を拾い集めるようにしたい。それで、研究発表、講演、挨拶など活字化される以前の業績についても、表示形式としては、文献番号なしで次のように記述するであろう。

■1953年5月1～3日<sup>32</sup>■ 58歳 NHK第一放送で「イギリスのこと」を講じる。そのときの原稿は【953701】で活字化された。【再録】: 『患者の知恵』(957620)。『著作集11』(968Y25)。

福原が残したと考えられる書籍、雑誌、新聞その他に掲載された文章のうち、総数の9割くらいを入手できたと考えている。所蔵先を突き止められないとか、何らかの事情で閲覧が許されないとか、情報そのものが不

分・不正確とかで、入手あるいは実見できていない残りの1割についても、後日を期するために、冒頭に\*(アステリスク)を付けて積極的に立項しておきたい。そうした場合、発行日が発見後に確定するので、\*付きの文献番号は暫定的なものとならざるを得ない。そうしたなかでも将来発見されればまとめて収穫に結び付く例を挙げておこう。研究社が1916年4月に旧制中学4～5年対象に創刊させた月刊誌『英作文雑誌』に、福原は約50篇を1919～23年に執筆したようであるが<sup>33</sup>、研究社にはこの雑誌が保存されておらず、国内の図書館はもちろん、ふくやま文学館にも所蔵されておらず、ただの一冊の存在も確認出来ていない。また単発的な文章としては、通信教育や放送テキスト類、芝居の演目解説、展覧会のカタログ、パンフレット類など、書籍としての流通に乗らなかった種類の印刷物も、公的機関に保存されることも少なく、文章の性格上どこにも再録されなかった場合が多いようだ。

現時点で筆者が入手できていない約350点のうち、200点前後が再録されていないので、放置すればそのまま存在すら忘れられてしまいかねない文章について、筆者が知り得た限りの書誌情報を『福原麟太郎著作目録』に記録しておくならば、おそらく後世に対してそれらへの注意を喚起し、退蔵されているかも知れない資料の活用を促し、今後の発見を誘引できるのではないかという意味でもまた、筆者がまとめようとしている『福原麟太郎著作目録』に多少の存在意義が認められるであろう。

以上に雑感として綴ってきた、当座の方針と漠然とした期待とを抱きつつ、筆者は収集してきた資料数千点を読み込む作業に着手しようとしている。ふたたび扇子の喩えに戻るならば、今度は扇面を貼って絵を入れる作業に取り掛かろうとしているのであるが、筆者としては *festina lente* (ゆっくり急げ) たるをモットーに、興に任せてのんびりと福原文学を味わいながら読んでいきたいものと考えている。

(2010年9月)

<sup>31</sup> 荒正人著『漱石研究年表』(集英社, 1974)や坂東浩司著『詳述年表: ラフカディオ・ハーン』(英潮社, 1998)でイメージされる福原年譜に著述業績を対照させた年譜兼目録が理想的なのだろうが、現在筆者は福原の文業を味読することに専念したい心境にある。

<sup>32</sup> 参照した資料でも収録日と放送日とが混在して、それらの区別ができないままになっている。

<sup>33</sup> 本誌については、福原本人が『英語研究創刊五十年記念号』(研究社出版, 1959)において、「『英作文雑誌』に『寄稿が』いくつかあります。…大正5年4月に『英語研究』が100号記念を出してね、その時『英作文雑誌』が久保田[正次]さんの主筆で始まったと思います。そして『英作文雑誌』が7年続いて、12年7月に『英作文雑誌』と『英語研究』とが合併したんですね。」と述懐している。なお掲載本数は、『英文学の輪廓』(研究社, 1923)など福原の初期の刊行書ちゅうの初出情報から集計したもので、再録されなかった記事の有無については、『英作文雑誌』が発見でもされない限り知る術がない。なお、研究社社員の方々には様々な調査依頼に対応して頂きました。末筆ながらお礼を申し上げます。

